

地域権力の雑掌僧とその活動

——大内氏の対幕府政策と興文首座——

貝 英 幸

はじめに

応仁文明の乱以降、遣明使節は迷走を続ける状態にあった。使節派遣が計画されるやいなや、そこは細川・大内の両勢力に加え、伊勢氏や相国寺・建仁寺など諸勢力の思惑が入り乱れる場となり、実際に使節が日本を発つまでに、当初の計画が二転三転するのは当然のこと、場合によっては使節派遣の計画が途中で消滅することさえあった。

そうした中大内氏は、遣明使節の主導権争いにおいても不利な立場に置かれていたが、長享二年五月、勘合一枚を蔭涼軒から入手することに成功する。それはひとえに勘合を管理する蔭涼軒に対する雑掌僧による地道な働きかけが実を結んだものである。特に在京していない大内氏にとって、実際に働きかけを行う彼らの果たした役割は大きい。そこで本稿では、地域権力と特殊な関係を結び様々な役割を果たす「雑掌僧」について、彼らの具体的な活動を、彼らの関わった政策を考慮し検討していくこととする。^①

ところで、雑掌という言葉自体の意味は、『日葡辞書』にも「伝言を持たせて人の許に遣わされる者」^②とあるように、文書の送受を中心とした、あくまでもメッセンジャーとしての役割をこなす者を指すと考えるべきであろう。

しかし地域権力の雑掌の場合、彼らの主たる役割がいくら京都と各領国との連絡にあったとはいえ、連絡は中央と地方という物理的な距離を隔てた地域間で行われるのが常であった。これは雑掌の担う役割が、単に地方からの用件を京都へもたらし、また京都からの情報を地方へもたらすという単純なものでないことを意味する。すなわち彼ら雑掌は、情報の送受に際し必然的な形で、政治的な交渉・工作に接することとなるのである。加えて本稿で検討する「雑掌僧」の場合、彼らには特別の役割が期待されていた可能性が高い。

彼ら雑掌僧の多くは禅僧であったが、室町期禅僧たちの多くが宗教的な面だけでなく、種々様々な場面で活動していたことは周知の通りである。彼らは時には権力の政治顧問として、また時には外交官的な役割を果たしたわけであるが、そうした役割は、禅僧達が内外の豊富な知識を有する一方、国内のみならず海外にまで活動の場を求めたことによる貴重な経験が頼りにされたものである。^③豊富な知識と巧みな交渉術、これこそが雑掌僧に期待された最も重要な役割であり、彼らの活動は単なる情報の送受・伝達という枠組みで把握できるものではなく、本来的に政治的な活動・工作を念頭に置いた上でのものであったと考えられる。別の言い方をするならば、彼ら雑掌の行動は、地域権力の対外政策のキャスティングボードを握っていたのである。

さらにその一方で、雑掌の中でも雑掌僧は、表面上は宗教者であり、地域権力と関わりを持つとはいえ、その関係は武家雑掌等とは異なり単純な被官関係ではなく、その立場は極めて特殊である。したがって雑掌僧について考える場合、一般の雑掌と同様に、一権力に仕え情報の伝達を担うという視点だけでは、彼ら本来の姿、あるいは雑掌僧によつて支えられている地域権力の対外政策の本質は見えないのではなからうか。雑掌僧が地域権力とどのような関係を結び様々な役割を果たしていたのか、地域権力の対外政策における雑掌僧の立場を、彼ら自身の具体的な活動を考慮し検討する必要がある。

在京雜掌への就任

ここではまず、大内氏雜掌僧の京都における活動について、情報の伝達と政治的な交渉・工作という二つの面からその実態を見ていくこととする。なお大内氏雜掌および雜掌僧については、小林氏が変遷表を作成しておられるので、ここではそれに依拠しつつ、雜掌僧の中でも特に目立った活動の確認できる者を取り上げ検討することとする。

大内氏の雜掌僧としては、松雪軒、興文首座（藏主）、秀文首座、正法寺らが既に知られている。彼ら雜掌僧はいずれも在京雜掌として確認されるが、彼らの京都における活動の期間は、松雪軒が寛正年間、興文・秀文が文明から明応年間にかけて、そして正法寺が天文年間である。後述するように、興文・秀文の場合のように特別の理由がない限り、いずれの雜掌僧も活動は数年程度であり、かつその時期が重なることはない。ただ彼らの在京雜掌としての活動期間については、その大部分が日記などの記録類によって確認されるのみであるという史料的な制約を受ける。このため彼ら雜掌僧の活動の実態は、記録の残存の具合に左右されるわけであるが、いずれの雜掌僧も京都における活動時期が十年程度はずれており、同時に活動していた可能性は低いとみてよからう。

さて、彼ら雜掌僧の任務は、彼らを雜掌ととらえるならば、京都と領国との連絡、必要な文書の受け取りと提出が主たる内容であったと考えるべきであろう。しかし実際には、彼らの活動はこうした任務の枠組みを越え、より重要な政治的案件を取り扱う必要が生じることもあった。まずはそうした雜掌僧の活動について、東興・興文を例に具体的に検討してみよう。

雜掌僧中、文明年間を中心にその姿が確認できる興文は、在京雜掌僧の中でも特に積極的な活動を展開した人物で、当該期の日記類に多く散見されると共に、大内氏の在京雜掌僧としては長期に渡りその活動の内容が詳しく判

る人物である。

興文の在京雜掌としての活動が確認されるのは、文明十一年（一四七九）から長享三年（一四八九）までの十年間である。興文が大内氏雜掌として最初に確認される文明十一年は、応仁文明の乱の混乱がようやく収束に向かいつつある時期で、京都および幕府周辺も落ち着きを取り戻しつつあった。しかし大乱において西軍に属した大内氏は、乱後の幕府内部における自らの立場を有利なものとする必要に迫られていた。とりわけ対外交渉への積極的な関与を指向する大内氏にとって、幕府および朝廷への働きかけは必須であり、極めて重要な政治課題の一つであった。興文が在京雜掌として活動を命じられた背景もこうしたあたりにあると推察される。

さて興文は、文明十一年七月、在京雜掌最初の任務として領国内の水上山興隆寺別当・清水寺別当の僧位昇進に関する働きかけを壬生晴富に行つた。⁽⁵⁾ 両寺は共に山口にあり、水上山興隆寺は大内氏の菩提寺、一方の清水寺も大内と関わりの深い寺院である。大内政弘はこの両寺の別当について僧位昇進を望んでおり、そのための口宣案発給を官務壬生晴富に直接働きかけたのである。ただここの興文の申し入れは、僧位昇進の話自体は既に前年より伝えられていたため、実現を図るための最終的な要請といった意味合いが強いものであった。さらに続けて七月から九月にかけて興文は、公方周辺への進貢や寄付、大内教弘贈位の折衝など、矢継ぎ早に活発な活動を行っている。⁽⁶⁾

このように興文の在京雜掌としての活動は、当初より極めて活発であつたが、その後興文は、その姿が確認できなくなる長享三年までの十年間に渡り、大内氏よりの公家・武家への贈物にはじまり、後述するような勘合獲得のための幕府に対する働きかけ、菩提寺の扁額揮毫に関する三条西実隆への働きかけなど、在京雜掌として多岐に渡る活動を行っている。では次にそれら興文の活動について具体的に検討してみよう。

文書の送受

興文の諸活動のうち、最も注目すべきは幕府周辺における活動である。その内容は具体的には、守護大内氏の雑掌僧として、幕府よりの命令の伝達あるいは文書の伝達といったものから、勘合獲得のための幕府との交渉・工作活動に至るまで幅広い性格を有していた。ここではまず雑掌の職掌として最も基本となる文書などの提出について、『蔭涼軒日録』で確認できる事例を見てみることにする。

文明十八年（一四八六）五月、幕府では九州使節派遣に際し、その警固を大内氏・松浦氏に命ずることとなった。幕府からの命令は、大内・松浦両氏に対し文書で伝えられたが、大内氏には御内書が、松浦氏には奉書がそれぞれ発給された。その際興文は文書を受け取ったわけであるが、ただここで注目したいのは、文書の発給に際しての興文の一連の行動である。

当初幕府内部では、大内氏・松浦氏に警固を命ずることは決していたものの、大内氏・松浦氏が命令に難色を示すことも予想していたようで、具体的にどのような形で命令を下すかについては定まっていなかった。しかし興文は、幕府側から国の時宜を尋ねられた際「則大内事者、雖為何事、為上意者可応尊命、可致忠節、殊被下御内書者可忝存⁽⁹⁾」と回答し、幕府の懸念を払拭している。すなわち興文は、大内氏側が幕府の命に従うことを表明すると共に、命令は御内書を発給することにより行われたことを伝えたのである。

周知の通り御内書は、將軍による書状形式の命令文書であるが、大内氏側がこの様式による命令を要望したということは、単に將軍の權威を認め命令を履行することを約したことを意味するだけではない。後述するように、大内氏にとつての御内書は、重要な「公驗」であると同時に、幕府に対する政治工作を進める上での抛り所でもあった。加えて興文が先の発言に続けて「松浦方江被成御内書者大内無曲可存」とも述べているのは興味深い。自らには御内書を発給するよう求めたことを考えれば、この興文の発言は重要であろう。興文は松浦氏に対しても御内書を発給し命令することもやむを得ないと述べたわけであるが、それは「無曲可存」程度のものであり、暗に松浦氏

に対しては大内氏とは異なつた様式、つまりは格の下がつた様式による文書の発給を要求したといえるのではなからうか。

このように興文は、幕府から大内氏への命令に際して、実際に命令が行われる文書の様式を指定しているばかりか、同時に下される他の地域権力への命令の様式にまで言及することにより、大内氏の地位確保を図っているのである。

幕府に対する工作活動

次に興文による交渉・工作活動について検討する。

文明十八年（一四八六）六月十一日、興文は蔭涼軒主亀泉集証の元を訪れ、数通の文書案文を提出した。^⑩提出された案文は、將軍の御内書をはじめ伊勢氏・飯尾大和守（元連）・布施下野守（英基）らから大内氏へ宛てられたものであつたが、この文書の提出は幕府からの命令によつてなされたものではない。『蔭涼軒日録』同年五月三十日条によれば、案文提出以前に、興文の方より亀泉の許に「先年文明十四年、就渡唐之事、大内方江被成御内書、其案文為（愚）一見」との申し入れがなされた上で行われている。つまりこの文書提出は、興文の側から、すなわち大内氏の側から行われたものである。

奇しくも興文の申し入れから二日後、建仁寺住持秋柏和尚および良璞首座は、同じく亀泉集証を訪ね、同寺評定衆の連署による申し入れを行っている。^⑪その申し入れの内容は、同寺修造費用捻出のための遣明船経営についてであり、これにより幕府ではにわかに遣明船派遣が話題の中心となつた。しかしながら蔭涼軒主の許には既に興文によつて提出された文書案文があり、この建仁寺よりの申し入れも直ちに実現することは無かつた。

当時の遣明使節組織に際しては、一旦使節の派遣が決定すると、様々な方面より使節経営や使節団への参加希望

が殺到する状況であつたから、興文による申し入れは時宜を得たものであつたといえる。事実建仁寺の申し入れを受けた際、亀泉集証は興文の提出した文書案文を、秋柏和尚および良僕首座兩名に提示している。蔭涼軒と建仁寺の間でどのような会話がなされたかは不明であるが、おそらくは、次の遣明船派遣には大内氏の経営参加が確実である状況が、興文提出の文書によつて説明されたものと思われる。遣明使節に関する数多くの申し入れを受けそれを捌く必要のある集証によつて、興文により提出された文書案文は、建仁寺よりの突然の申し入れを阻む絶好の材料となつたであらう。

興文が申し入れを行った「先年文明十四年、就渡唐之事」とは、文明十五年（一四八三）二月に京都を出発した文明年間最後の遣明使節を指すが、その使節は、当初大内氏もその経営に加わるはずであつた。^⑩しかし遣明使節結成の過程で、堺の商人と結んだ取龍首座が勘合二枚を取得したことにより、その構成は幕府船および内裏船となり、大内氏は経営から除外された。ただ大内氏はその際、将来の遣明使節についての御内書を將軍義政より取り付けたようで、その時の文書案文が今回提出されたのである。つまり興文が提出した文書は、大内氏による単なる遣明使節への参加希望といった程度のもではなく、幕府自らが発給した遣明船経営への参加を保証した御内書であり、大内氏にとっては公驗といえるもので、次の遣明使節組織に際して、自らの立場を有利にする切り札でもあつた。一方幕府の対外交渉において担当者の一であつた蔭涼軒が最も重視したのは先規・先例であつた。^⑪そうした意味において、ここで興文が提出した文書案文は蔭涼軒にとつても十分に先例となりうるものであり、幕府にとつては無視できないものであつた。

加えて興文が文書案文を提出した時期も重要であらう。当時幕府には、文明十五年に出発した使節がまさに帰国し、長門国赤間関に着岸したとの報がもたらされたばかりであつた。^⑫建仁寺が蔭涼軒へ申し入れを行ったその日には、將軍義政に対し使節の着岸が披露されており、幕府の主たる関心は使節団の早期の入京にあつた。ではなぜ興

文は、次回の使節などについては全く話題にも上っていない段階で、蔭涼軒に対し突然に文書案文を提出したのであろうか。

これについては、興文が亀泉に伝えた次の発言がある。

然聞今又望渡唐之仁有之云々、然者自大内方如御内書司之也、万一又余仁司之者、大内可失面目云々¹⁵

これは、亀泉集証に文書の提出を要請した際、興文が亀泉に伝えた大内氏側の意向であるが、これにより大内氏側は「今又望渡唐之仁有之云々」という情報を得ていたことが分かる。ここでいう「望渡唐之仁」が建仁寺かどうかは確証はないものの、少なくとも興文は、近々何れかの勢力により渡唐に関する申し入れが行われる、という情報が入っていたのであろう。そしてその機先を制するためにも、早急な公驗提出が必要であつたのである。

以上見てきたように、興文の文書提出はそれ自体計算された行動であり、幕府に対する政治的工作に他ならないが、興文の幕府に対する政治的工作は、これ以外にもいくつか確認できる。特に幕府に対する文物の寄進の持ちかけは、興文の一連の工作活動のなかでも特徴的である。

競秀軒と在京雜掌

これまで述べてきたように、興文は頻繁に公家や武家、蔭涼軒や幕府関係者などの許を訪れ様々な活動を行っていた。その活動は公家たちとの日常的な接触に始まり、幕府に対する連絡や申し入れ、交渉など、在京雜掌が行った役割の大部分に及んでいた。更にそうした興文の活動は、その全てが必ずしも本国の大内氏の指示の下に行われていたというわけではなく、彼独自の判断に基づく部分も相当に及んでいたと思われる。こうした点からいえば、幕府に対する大内氏の工作活動は半ば興文一人に委ねられていたともいえるわけで、大内氏の政治的な浮沈の鍵は、とりわけ幕府外交に関する部分は、彼の活動いかにかかっていたと言つても過言ではなからう。ならば興文はど

のような人物であつたのであろうか。

これまで在京雑掌僧興文の活動について見てきたが、興文の名は当時大内氏と関わりのあつた公家や武家の記した当該期のほとんどの記録で確認される。その一方で興文は、『蔭涼軒日録』などの記録をはじめ、そのほとんどで「大内雑掌」あるいは「大内方雑掌」として記されるのみで、¹⁶彼個人の詳細を知る手がかりは少ない。これは彼と幕府や公家との関わりが、あくまでも「大内氏雑掌」としてのものであり、彼が大内氏を代表する形で諸方と関わりを持ったためである。したがって興文の履歴については不明な点が多いが、まず在京雑掌当時の興文についてみてみよう。

例えば興文の名称については、『晴富宿称記』文明十一年八月二十六日条には「競秀軒文蔵主大内雑掌」とある。¹⁷これ以外にも興文を「競秀軒」¹⁸と記したものはあるから、興文が相国寺内大智院の寮舎競秀軒の僧侶であつたことは確実であらう。さらに興文は、『蕉軒日録』文明十八年四月七日条では「(競)秀主人文東周」¹⁹と記されているから、競秀軒主をも嗣いでいたことになる。文明十八年頃は、興文が在京雑掌として特に活発な活動を行つていた時期でもあり、ちょうど同時期に競秀軒主をも勤めていたこととなる。

このように興文は、五山僧の一人として活動する一方、大内氏の在京雑掌をも勤めていたわけであるが、興文が競秀軒主でありながら、同軒に住していたかについては幾つか疑問な点がある。

まず第一の疑問としてあげられるのは興文の活動の変遷である。先にも述べたように、興文が大内氏在京雑掌として確認されるのは文明十一年からであるが、それ以前興文は在京していなかった。

大内使僧去月廿六日京着、今日来之、京兆有書状、北絹等送之、又僧官等事有申旨、抑京兆父教弘朝臣贈位事、自去年属一条殿禪闍申上候、可然之様有御了簡、勅許無相違之様可被懸御意候云々、²⁰

これは興文が在京雑掌として初めて壬生晴富の許を訪れた際の記事であるが、ここでは大内氏の使僧が去月(六

月)廿六日に京都へ到着したことが記されている。むろんここには使僧とのみあるだけで興文の名は見えないものの、かかる使僧が申し入れている内容が僧官などの事および大内教弘贈位の事であり、使僧が興文であったことはまず間違いない。すなわち興文は、在京雑掌として京都に来る以前は、周防国の大内政弘の許にいたことになる。

さらに興文の在京雑掌就任以前の活動についても、わずかではあるが、大内政弘の博多滞在中の日記『正任記』⁽²⁾で確認することができる。

応仁文明の乱後帰国した大内政弘は、文明十年十月筑前へ出兵する。この時政弘は筑前奪還をはかる小貳氏牽制の意味から博多へ出張だけであつたが、筑前国遠賀郡小倉山・花尾城などでは小規模な戦闘が行われた。これに對し大内氏は、花尾城を包囲する一方、籠城する麻生家延に對し城の明け渡しを申し入れた。

一 競秀軒興文蔵主、自麻生強洞山陣帰参候、家延申惣領職事御意尤也、不可成望也、於花尾城事難去進也、為御当方御城被預下度候由也、不可叶儀也、仍彼城并諸陣繪図持参候、⁽³⁾

右は『正任記』文明十年十月六日条であるが、それによれば大内氏は麻生家延に對し、花尾城を明け渡した場合には大内方として再度城を預けることを条件に城の明け渡しを求めている。この時は麻生氏の考えが翻ることなく申し入れは実現していないが、この時大内氏側の使者として、麻生氏に對する申し入れを行ったのが競秀軒興文であつた。そしてその後麻生氏は、大内氏の圧倒的な武力の前になす術なく、結局は十月二十七日に「懇望之条々」⁽²³⁾が申し入れられ、翌日には降参することとなつたが、その際興文は、麻生氏に對し城の明け渡しを命じる使者として再度花尾城へ遣わされている。つまり上洛の約十カ月前、興文は周防にあつて大内氏の陣僧として、敵方の陣へ赴き交渉を行う任にあたつていたわけである。時期的に考えれば、興文がこの後上洛し在京雑掌として活動することはほぼ確実であり、陣僧としての活動が後の在京雑掌として活動する直前の活動であつたといえる。想像を遅しくするならば、興文は陣僧など在国内の交渉活動が評価された結果、上洛を命じられ幕府との交渉にあたつた

ものかと推測されるのである。

次に疑問の二点目として在京中の興文の活動の拠点の問題をあげておきたい。

先にあげた『正任記』にもあったように、興文が競秀軒を名乗るのは在京雑掌としての活動をはじめる以前からのことであつた。一方競秀軒の名自体も興文上洛以前から確認される。²⁴ならば上洛した興文は競秀軒に身を寄せたのであろうか。

しかし実際のところ、興文は競秀軒とは別に活動の拠点を設けていたようである。『晴富宿祢記』文明十一年十一月二十二日条では「大内雑掌僧文蔵主宿^{春日室町}²⁵」とある。すなわち興文は春日室町を宿所としていたのである。いうまでもなく春日室町は相国寺より相当南方にあたるから、興文の宿所が相国寺内の競秀軒であつたとは考えがたい。ただこの宿所は、興文が上洛直後であること、あるいは当時相国寺そのものも再建の途中であることから、一時的なものと理解することも可能ではある。しかし興文の宿所については、興文の活動末期にあたる長享二年の段階でもなお確認できることから考えても、上洛直後のみの一時的なものではなく、恒常的に設けられていたと思われる。

興文は在京雑掌僧として大内氏の対京都政策の大部分を委任されていた。こうした一雑掌僧が重要な交渉ごとを任されるというのは別に興文に限ったわけではない。その点からいえば、大内氏の対京都政策、対幕府政策は在京雑掌個人によつて展開されたということもできる。しかし興文の活動時期に限つていえば、在京雑掌の職務は彼個人に集約されていたわけではなく、在京雑掌衆ともいふべき組織の下で活動していたようである。そこで次には、在京雑掌僧の活動母体、つまりは興文ら在京雑掌僧がいかなる組織を背景に幕府周辺での活動を行つていたのかという点について考えてみたい。

興文の在京雑掌としての活動期間が、文明十一年から長享三年までの十年間であつたことは先にも述べたとおり

であるが、この間興文の名が記録類から全く見えなくなる時期がある。

長享二年（一四八八）九月、幕府では硫黄使節の人選で行き詰まっていた。遣明船派遣の際、使船に搭載する硫黄は幕府より島津氏の許へ使節を派遣し調達することとなっていたが、この時期幕府周辺には適当な人物がおらず人選が難航、複数の人物が候補者に上っては消えるという状況であった。そうした中、興文は九月十六日、蔭涼軒に対し「硫黄使節之事、以光松西堂為居座、被遣之可然、殊今度渡唐之衆、皆大唐不案内之衆也、此松西堂兩度渡唐仁也」⁽²⁶⁾と、東福寺東帰光松を推挙する申し入れを行っている。使節については結局この興文の推挙が取り入れられる形となり、この後十月七日には、光松西堂が硫黄使節に定まることとなる。しかし推挙した当の本人である興文は、九月十六日に蔭涼軒の許を訪ねて以降、しばらくの間その姿を確認することができない。

途中九月二十三日には「自興文首座一行来」⁽²⁷⁾とあり、蔭涼軒へ書翰を寄せ硫黄使節人選の推移を確かめているのは確認できるものの、次に興文の姿を確認できるのは翌三年八月二十八日である。したがって興文はおよそ十一月もの間、幕府周辺からその姿を消していることとなる。

もちろん興文は、在京雑掌とはいえ常に京都に留まっていたわけではなく、それ以前にも近江へ出かけ京都を留守にしていることがあった⁽²⁸⁾。また長享三年七月二十六日には、相国寺内の十三院侍真が將軍に謁見することがあったが、大智院侍真であった興文は「依不例不参」⁽²⁹⁾しているから、この間病に伏せていたとも考えられる。いずれにせよこの間興文がどのような活動をしていたのか判然としないが、その一方で従来から彼が行っていた在京雑掌としての任務は滞ることなく行われている。

興文不在の間、在京雑掌僧としての彼の任務を行ったのが秀文首座であった。秀文は、興文の後に大内氏在京雑掌僧として同様の役割を果たすようになる人物であるが、秀文もまた興文と同じ競秀軒の僧侶であった。興文が不在となった直後、秀文は亀泉の許へ硫黄使節に関する書翰を寄せている⁽³⁰⁾。詳しい内容は不明なものの、時期的に考

えてもおそらくはそれ以前興文が進めていた光松西堂推挙の内容を承けたものであつたろう。

その後秀文は、興文が在京雜掌としての任を終えてからは、それ以前興文が行つていた幕府に対する諸交渉を、興文の活動とほぼ同様の形で進めている。交渉の内容もほとんど同様であるし、さらには記録への記され方も興文の場合となら変化するところはみられない。こうしたことから考えても秀文は、興文の在京雜掌としての活動末期には、その仕事を引き継ぐ形で在京雜掌としての活動を開始していたと考えられる。しかしその一方で秀文は、興文が大内政弘から直接の命をうけ上洛してきたのとは異なり、当初は競秀軒の雜掌として活動していた。秀文が競秀軒所領であつた勝田莊領家方の事に関し書翰を伝達している例などは、その証左となる好例であろう。つまり、在京雜掌としての興文の活動は、大内氏の対幕府政策の上で重要な位置を占めていた。が、その内容の特殊性ゆえ、任務は興文個人に委ねられ、彼個人のレベルで完結する可能性をはらんでいた。しかし大内氏は、任務を継承し継続した活動を保障する体制を整えつつあつた。その拠点が競秀軒であつたのである。

おわりに

大内氏の在京雜掌僧である興文について、これまで検討を通じて、明らかとなつた点は以下の通りである。

文明年間を中心に京都において活発な活動を展開する興文は、在京雜掌としての活動を行う以前、周防にあつて陣僧として活動するなど、当初より政治的な交渉を主たる役割としていた。その後興文は上洛して在京雜掌としての活動をスタートするが、在京雜掌としての興文の役割は、公家・武家を問わず大内氏と京都諸方との関係の大部分に及んでいた。その内容は、大内氏からの申し入れを伝達する一方、文書発給などの際には様式にまで言及する、あるいは幕府の対外交渉の分野についての交渉では、自らが収集した情報をもとに必要に応じて文書を提出するなど、彼独自の判断に基づくものが多い。そうした興文の活動は、雜掌とはいえ単なるメッセンジャーとしてのもの

ではなく、時には「ネゴシエーター」として、またある時は「全權大使」としての活動であつた。またこうした興文の活動は、彼が競秀軒を名乗ることによつて行われたが、実際の活動は宿所を拠点に展開された。特に文明十八年頃、興文が同軒主を勤めたころより競秀軒の名は、当該期の大内氏の雑掌僧の拠点ともいふべき存在となつていたので、そこでは後の雑掌僧である秀文も活動を開始するのである。

一方今後の課題も多い。まず一つは、在京雑掌の活動組織についてのより詳細な理解である。今回の検討では、興文から秀文への職掌の継承がスムーズに行われ、興文・秀文が共に競秀軒という大智院内の塔頭の僧侶であつたことは確認できた。しかしながら、興文・秀文が活動の背景とした組織については、未だ十分に言及できたとはいえず、そうした在京雑掌の組織を雑掌僧だけでなく、武家の被官をも含んだ形で理解する必要があると考える。

そして今一つは、大内氏の在京と雑掌僧との関係についての検討である。今回の検討はあくまでも興文を中心にしたものであつた。すなわち興文が在京雑掌として活動する期間大内氏は在京していない。こうした地域権力の在京と雑掌僧任命の関係についての検討は、雑掌僧の活動を考える上でも、また地域権力の対幕府交渉を考える上でも必要な視点であろう。ただ実際には地域権力の在京時は、在京雑掌の活動は水面下の活動となり、今回の興文のごとき積極的な活動は確認できなくなる。見通しの述べれば、在京雑掌僧は地域権力が在京していない時期にこそ任命される特殊な存在であり、そうした在京雑掌僧も、それ以外は五山の一員として行動したと考えるが、あくまでも推測の域を出るものではない。今後こうした点についてのより一層の検討が必要であろう。³²⁾

さて、長享二年三月十六日、興文は蔭涼軒の許を訪れた。その理由は、当時興文が蔭涼軒から要請されていた次の遣明使節への参加を正式に断るためであつた。その際興文は在京雑掌僧の活動が基本的な抱える矛盾を端的に表現している。

居座事雖応台命、必可違太守命、然者為公私不可然、縦及出奔可令峻拒、以此旨達台聽可為素望云々、³³⁾

興文自身は、將軍の命令と主人大内氏との命令の間で悩み、自らの立場を捨てることを表明してでも要請を断るほか無かったのである。その後興文は、長享三年八月二十七日「自左京大夫勘合事白之」したのを最後に、在京雜掌としての姿を消す。理由などその詳細は全く不明であるが、その後も興文は五山僧の一員として行動しているのは確認されるから、決して領国へ下ったわけでも、亡くなったわけでもない。あるいはこの発言が発端だったのかもしれない。

注

- (1) 大内氏の雜掌については、既に小林健彦氏による「戦国大名家在京雜掌を巡って―大内氏の場合―」（『駒沢史学』三九・四〇合併号、一九八八年）、「大内氏の対京都政策―在京雜掌（僧）を中心として―」（『学習院史学』二八号、一九九〇年）がある。氏は、雜掌の中でも「在京雜掌」に注目され、かかる雜掌の職掌を四点に要約されたが、特にその第二点目で「本国を代表した全權大使としての役割」として「政治的交渉・工作」を指摘されている。しかし本文中でも述べたように、メッセンジャーとしての「雜掌」と、特殊な任務を与えられている「雜掌僧」を同一に語ることではできないと考える。
- (2) 『邦訳日葡辞書』（一九八〇年、岩波書店）八四二頁。
- (3) 西尾賢隆「京都五山の外交的機能 外交官としての禪僧」（『アジアのなかの日本史』Ⅱ外交と戦争、一九九二年、東京大学出版会）。
- (4) 小林前掲注1論文参照。
- (5) 『晴富宿称記』文明十一年七月四日条。
- (6) 『晴富宿称記』文明十一年七月二十七日条、同八月十三日条。
- (7) 『実隆公記』文明十八年七月四日条。
- (8) 『蔭涼軒日録』文明十八年五月一日条。
- (9) 『蔭涼軒日録』文明十八年五月三日条。
- (10) 『蔭涼軒日録』文明十八年六月十一日条。
- (11) 『蔭涼軒日録』文明十八年六月十三日条。
- (12) 小葉田淳『中世日支通交貿易史の研究』（一九四一年、刀江書院）。
- (13) 勘合を管理する蔭涼軒が、対外交渉の分野においては中立的な立場で対処したことについては、拙稿「中世後期における地域権力の対外交渉と寺院―交渉実務を中心に―」（『佛教大学総合研究所紀要「宗教と政治」、一九九八年）を参照されたい。
- (14) 『蔭涼軒日録』文明十八年六月十三日条。
- (15) 『蔭涼軒日録』文明十八年五月晦日条。

- (16) 『蔭涼軒日録』において、「大内雜掌」とあるのは文明十八年五月三日条、同年六月五日条、長享二年二月十一日条。「大内方雜掌」とあるのは、文明十八年五月晦日条、同年六月十三日条。その他『晴富宿祢記』文明十一年七月二十七日条、『後法興院記』文明十九年正月二十七日条などでも「大内雜掌」とある。
- (17) 『晴富宿祢記』文明十一年八月二十六日条。
- (18) 『蔭涼軒日録』文明十八年三月十二日条。
- (19) 『蔭涼軒日録』文明十八年四月七日条。
- (20) 『晴富宿祢記』文明十一年七月二日条。
- (21) 『正任記』は『山口県史』史料編中世Ⅰを用いた。
- (22) 『正任記』文明十年十月六日条。
- (23) 『正任記』文明十年十月二十七日条。
- (24) 例えば、寛正五年正月二十日条、同年四月一日条では本寺のことに關して見えている。
- (25) 『晴富宿祢記』文明十一年十一月二十二日条。
- (26) 『蔭涼軒日録』長享二年九月十六日条。
- (27) 『蔭涼軒日録』長享二年九月二十三日条。
- (28) 『蔭涼軒日録』長享二年正月二十四日条。
- (29) 『蔭涼軒日録』長享三年七月二十六日条。
- (30) 『蔭涼軒日録』長享二年十月七日条。
- 興文よりの依頼をうけた壬生晴富は、七月から閏九月にかけて興文との談合を繰り返しつつ朝廷に働きかけを行つたが、結局は「武家者三位事不可有先規之由」ということで実現しなかつた。しかし大内氏は贈位を諦めず、ようやく文明十八年に、白川忠富王らの口添えにより贈位を実現させている。
- (31) 『蔭涼軒日録』長享三年二月八日条。
- (32) 五山僧の出自については、原田正俊氏が「中世後期の國家と仏教」(『日本中世の禪宗と社會』結論、一九九八年、吉川弘文館)において、室町期には公家や足利氏など出自が明確な者が多くなる一方、守護大名庶子家・奉公衆・公家被官・國人領主クラスの師弟の入寺も増加することを指摘しておられる。今回検討した興文や秀文をはじめ大内氏の雜掌僧についても、こうした点を考慮し検討する必要がある。
- (33) 『蔭涼軒日録』長享二年三月十六日条。